

# Lang-8 と Google translate を併用した 英語の苦手な (日本) 人のための 簡単でお金も手間もかからない英作文訓練法の紹介

英語で思い通りに話せるようになりたいなら, まず思い通りに書けるようになるう

黒田 航 (KURODA, Kow)

杏林大学 医学部 (Faculty of Medicine, Kyorin University)

Created: 2017/02/07; Modified: 2017/02/08, 09, 10, 16, 17

## はじめに

本文書で私が述べる事は次の二つ: 1) 英語が得意でないのに英語で話せるようになりたいと思っている (日本) 人は, 英語で話す訓練をする前に英語で書く訓練, 特に基本訓練をする必要がある. 2) そのような基本訓練は工夫をすれば, 誰でも一人で無料で実践できて, 十分に効果が上がる. その工夫は Lang-8 (<http://lang-8.com>) と Google translate (<https://translate.google.com/>) という二つの無料オンラインサービスの併用である.

提案方法は, 次の学習の (逆行) エンジニアリングの産物である:<sup>1)</sup>

- (I) a. (英語と言語距離が遠い日本語を母語とする日本人が) 英語で自由に話せるようになるためには, それに先立って英語で自由に書けるようになる必要がある.
- b. 英語で自由に書けるようになるためには, 伝統的な一対多の英作文の指導法は効率が悪い (ので, やらない方がマシかも知れない). それに代わる効率の良い方法を開発する必要がある.

<sup>1)</sup>本稿の執筆の過程で次の方々からの指摘, 示唆, 助言が有効であった. この場を借りて感謝したい: 原田 康也 (早稲大学法学院), 折田 奈甫 (東北大学大学院情報科学研究科), 山崎 章裕 (長野県東御清翔高校). なお, 残存する過誤は筆者の責任である.

- c. 英作文の訓練には, 基本訓練ですら相当の労力が必要である. 特に辞書を引ながら単語ごとに日本語を英語に直すとなると相当に手間がかかる. これだけで学習者が訓練から遠ざかる十分な理由になる. 従って, 多くの人が英作文に進んで取り組むようになるためには, とっかかりの閾値を下げる工夫が必要不可欠である.

全体の構成は次の通り: 先に訓練法の概要を§1.1

で示し, それに続けて§1.2 で開発動機を説明する.

§2. で訓練の詳細を追加する. 最後に§2.4 教育の方

法論について付記する.

## I. 訓練の概要と背景理論

### I.1 訓練の概要

紹介する訓練の概要は次の通りである:

- (2) Lang-8<sup>2)</sup> という, 無料のオンラインの多言語相互作文添削サービスがある. このサービスを学生に (i) 一定の指針を与えて利用させ, (ii)

<sup>2)</sup>Lang-8 の利用法は, 本文書では細かく紹介しない. Web 検索で分かる事だからである. なお, Lang-8 は英語と日本語の対だけでなく, ほぼ任意の言語対で成立する.

英作文を自主学習させる [(i) の内実については§2. で説明する] .

- (3) 学生には Lang-8 に英作文を投稿する時に、低品質な英文を苦勞して独力構成したものより、原案を日本語で書き、それを Google translate を使って英語に翻訳し、結果を必要に応じて編集したものを投稿するように勧める .

これは一人で実行できる至って簡単な方法であり、お金も (ネットの利用料金の他には) かからない .

私は本方法を、自分の英語の多人数授業で英作文を指導ができない状況を改善するための苦肉の策として思いつき、学生に試用を推奨した . 実際にやって見た学生には好評である . 彼らの反応から見て、それなりの効果が出るようである<sup>3)</sup> . この方法がどうして効果的だと私が考えたのかを、以下で説明する .

## 1.2 英語で話す訓練の前に書く訓練を: 背景の説明

多くの日本人は英語が (苦手とは言えないまでも) 少なくとも得意でない . 社会人であれば当然として、大学生であっても状況が良いとは言えない . 私は大学の英語の教員であり、英語が「得意でない」学生に日々接している . 私の実感では、英語が利用できる人の割合は 10% に満たない .

### 1.2.1 どうやったら英語が V ようになりますか？ (V = 話せる)

私に日頃、学生からもっとも多く寄せられる質問は次である:

- (4) どうやったら英語が話せるようになりますか？

これは本当に、本当に多くの学生の英語の苦手感の中核を占めている意識のようである .

<sup>3)</sup>ただし現時点で定量評価は未実行 .

大学生に限らず、多くの人が英語がしゃべれる自分に憧れているのだと思う . ただ、そのための要件を理解しようとしている人は少ない . (巷で言うスピードラーニングのような) 「魔法の学習法<sup>4)</sup>」を手に入れたら、それさえできれば、ほとんど苦勞なく英語のしゃべれる自分を手に入れられる—なのに、自分は運悪く「魔法の方法」を知らない—きっと多くの人がそう思っている . 魔法の方法の存在を信じていなくても、同じような期待を英会話学校に対して抱いている人も少なくないだろう .

だが、これは報われない期待である . 絶対に報われないとは言わない—人によって下地が違うから . だが、仮にそんな魔法の学習法があるなら、逆に世の中に英語が得意でない人が数多くいるという現実の方が説明し難い .

事実に基づいて確実に言える事は次である:

- (5) 「良い話し手になりたいなら、先に良い聞き手になりなさい」という大前提
  - a. 英語で話せるようになる前に、相手が英語で話している事がちゃんと聞きとれるようになるのが先決である .
  - b. 相手が英語で話している事が聞き取れるのは、バラバラに発声された単語を聞き取るのとは完全に違う技能である .

だが、私が見聞きした大半の事例で、英語が不得意な学習者は (5) の事実を理解していない . そうではなくて、相手の言っている事がちゃんと聞けもしないのに、話せるようになりたいと思ってい

<sup>4)</sup>私自身はこの種の魔法の学習法を試した事がない . だから、私の評価は公平ではないかも知れない . だが、私は悪意からこの手の学習法に効果がないと言っている訳ではない . 私自身には数々の魔法の学習法の実効性のなさを自分で出費して証明する動機も責任もない . 不死の薬が存在しないと主張する根拠としては、不死を得た人が一人もいないという事実があれば十分である . どんな方法でも実効性の立証責任は、実効性を主張する側にある . この事を明示した上で言えば、自分としては、利用者モニターとして魔法の教材を提供して頂けば、第三者として実効性を検討する用意がある .

る<sup>5)</sup>。これが空想的な願望である事は、敢えて指摘する必要もないだろう。

### 1.2.2 どうやったら英語がVようになりますか？ (V = 読める)

これに対して、次の質問は余り受けない:

#### (6) どうやったら英語が読めるようになりますか？

この事実を誤解すべきではない。多くの日本人大学生がこの質問をする意味を感じない程に英語で文章が読めているか？と問うと、答えは明らかに否。現実には単に読めていないという自覚を持つ機会が少ないだけである。そんな人たちが例えばTOEFLやIELTSの試験を受けたらどうなるか？自分たちが英語を実用的な速度や精度で読めていないという冷酷な現実を知り、それに打ちのめされる訳である。

ここでは「実用的な速度や精度で」という面を強調しておく。辞書を使って、非実用的な速度で英語の文章を「読解」する事ができない日本人は実は、それほどいない。だが、これ自体が奇妙な事なのである。異国語を実用的でないレベルで習得している個体が多数派であるという状態は、言語習得の常識から外れている。何かがおかしい。私が想像力を最大限に逞しくして得た結論は、大半の日本人にとって英語の修得は実用的な技能ではなく、お稽古事なのである。

<sup>5)</sup>この意識の乖離の実体の素地を確かめるのは学習の科学の見地では非常に興味深い事である。と言うのは、この意識はおそらく、英語に限った事ではないからである。自分の非公式な観察によると、日本人は母語の日本語ですら、ちゃんと聞く技能の重要性を軽視しがちである。だが、これは本稿の主題ではないので、脇に置く。

### 1.2.3 どうやったら英語がXようになりますか？ (X = 書ける)

以上の事情はそれ自体で改善の余地がある思う<sup>6)</sup>が、本稿で取り上げたいと思っている話題ではない。

私としては相当に奇妙だと思っているのは、(7)の質問を受ける回数が非常に少ない事—実質的に受けない事である:

#### (7) どうやったら英語が書けるようになりますか？

加えて言うと、私は自分の指導経験から次の印象を持っている:

#### (8) 英語で書けるようになる事は、多くの日本人には優先順位の低い、オマケに近い技能だと思われている。

これは本当なのだろうか？

### 1.2.4 書く訓練の(意外な)効能

先の(8)の妥当性はともかく、これから伺える事がある。それは次である:

#### (9) 日本人として英語を異国語として学んでいる大半の学生—いや、大半の人—は英語が書けなくても話せると思っている。

理論的には確かに、話し言葉の習得は書き言葉の習得を前提にしない。これは第一言語については真である。

それから確かに(9)が真である日本人がいる事は、いる。だが、そういう人はいわゆる英語使用圏からの帰国子女と呼ばれる人たちで、英語が身の回りで使われる経験をした人たちではないだろうか？英語を異国語として習得するという目標を

<sup>6)</sup>効果の見込める改善案については(黒田 2011; 黒田 2012a; 黒田 2012b; 黒田 2013)で概観した。興味のある方は参考にしてください。

考えた時、彼らを「普通」の日本人と同じように扱って構わないのだろうか？

ここで問題設定を明確にしよう。中学校や小学校で初めて英語に接する「普通」の日本人が英語を効率的に異国語として習得するのを目標にした場合、(9)は妥当な想定なのか？別の言い方をすると、次の問題の真偽はどうか？

- (10) 特定の言語（例えば日本語）を母語として習得している（ほぼ）成人が、書き言葉を習得せずに話し言葉を習得できるのか？

#### 1.2.5 本当に学習効果の上がる訓練を

他の英語教員が本音でどう思っているか私は知らない。だが、私は自分の英語習得の経験から(10)の答えが否だと確信し、その代わりに真なのは次だと確信している：

- (11) 特定の言語（例えば日本語）を母語として習得している（ほぼ）成人は、書き言葉として英語を習得しないうちは、話し言葉として習得できない。

この帰結は簡単に言うと、次の遡行エンジニアリング的発想の産物である：

- (12) a. 言うべき事が英語として頭にぱっと思い浮かばない状態で英語で何かを言う事は無理（なのに、多くの人が無理にこれを実現しようとしている）。
- b. 英語が英語として思い浮かぶ状況は「話す」という切迫度の高い条件でなく、「書く」という切迫度の低い条件で訓練すべき。
- c. 英語で話せるようになるとは、書く事で身につけた英語で文を作る技能の (I) 実

行速度の高速化 + (2) 内容の音声化で実現される。

今後のために用語を定義しておく。言うべき事が英語として頭にぱっと思い浮かぶ状態を「基本的英作文力」を身に付けた状態と言う<sup>7)</sup>。

(12) で重要なのは、話す行為は単に、書く行為の音声化ではないという点である<sup>8)</sup>。

ここで次の形で課題を明確にして置こう：

- (13) しっかり話す事の難しさの正体は、音声化の困難によるのと同じ位に、いやもしかしたらそれ以上に処理の高速化の困難による可能性が大きい。

(13) が正しいとしたら、簡単な事が英語で書けないのに話す訓練をしても効果が上がるはずがないと予想できる。私はこの予測が真で、英会話学校に通っても効率的に話せるようになる人が滅多にいないという経験事実を説明していると思っている<sup>9)</sup>。

#### 1.2.6 基本的訓練 ≠ 本格的訓練

基本的英作文力を身につけるには、そのための訓練、つまり基本的訓練が必要である。英作文の訓練が必要だと言っても、必要なのは一般的訓練ではなく基本的訓練である。この区別は重要である。基本的訓練で私が何を意図しているかを明確にしておきたい。

基本的訓練の意味は (I<sub>4</sub>) である：

<sup>7)</sup>この用語を使って日本人にとっての英語習得の根本問題を明確にすると、大半の日本人は相当に長い期間—少なくとも中学3年間と高校の3年間—にわたって英語を学ぶのに、英語の基本的作文能力を身につけない。それは受験で必要になる一部の技能（例えば文法問題で正解する事、読解問題で正解する事）の技能が過度に強調されているからに他ならない。

<sup>8)</sup>なお、これには逆の面もあり、書く行為は話す行為の脱音声化ではないも真である。これには教育的に興味深い意味があるのだが、今は議論を単純にするために掘り下げない。

<sup>9)</sup>一部の例外的に話す技能を獲得する人の要件が明らかになれば、例外も説明できる可能性もある。

- (I4) a. 英作文の「初歩的訓練」は、英語の母語話者のように英語で文章を書く訓練=本格的訓練を意味しない。
- b. その代わり、英語の単語(のようなもの)を、英語らしく並べるための訓練を意味する。

実際、大半の日本人は中学と高校で合わせて6年間英語を学んだ後に、英語の単語(のようなもの)を、英語らしく並べられない状態にある。この状態で必死に話す訓練をしても労多くて実り少なしで終るのは、ほぼ自明と言うべきである。

どうせやるなら効果の出る訓練をするべきなのである。効果の出ない訓練に時間やお金を注ぎ込むのは単なるムダか、そうでなければせいぜい自己満足でしかない。

#### I.2.7 言語距離を考慮した学習戦略を

適応範囲を限定するために、ここで付記して置きたい事がある。それは(I1)はどの言語を母語として育つかによって真偽が変わるという事である<sup>10)</sup>。これはおそらく英語を非母語として学ぶすべての人に真な規定ではない。英語と言語距離が近い言語(例えばドイツ語、フランス語、ロシア語、ヘブライ語)などの言語を母語する人は、書き言葉の習得せずに話し言葉を習得する事は普通の事だろう。だが、一部の言語を母語とする人たち—おそらく日本語を含めて英語から言語距離が遠い言語を母語とする人たち—にとってはそうではないのである<sup>11)</sup>。

<sup>10)</sup>この論点の明確化は、原田康也(早稲田大学法学院)からの指摘に拠る所が大きい。感謝したい。

<sup>11)</sup>しかし、英語教師がこの事をどれくらい意識しているかは、相当に疑問である。

#### I.2.8 話す訓練より先に書く訓練を

以上は仮説である。だが、これが真だとすると、話すための訓練をどう設計すれば良いかは、ほぼ自明である。次のようにするのが最適である:

- (I5) a. まず急かされない状態で言える=書けるように訓練する。
- b. その後に、通常の産出要求に合うように産出速度を上げる訓練をする。

お断りしておきたいが、私には(I1)や(I2)や(I3)の正しさを「科学的に証明」するだけのデータがない—少なくとも今の所は。それでも現実的な目標、特に教育的な目標から(I1)や(I2)や(I3)が真だと想定する事は非常に有効だと思っている。それは実際に、(I5)に基づいて私が行っている指導法に成果が上がっているからである。

#### I.2.9 産出型の訓練の重要性

日本人が獲得する言語技能は非対称である。受け取り手に求められる技能(e.g., 読む, 文法問題を解く)の訓練ばかりをして、送り出し手に求められる技能(e.g., 話す, 書く)を訓練しない。これは受信技能と発信技能の間に、専門的には受容(reception)と産出(production)の間に、非対称があるという事である<sup>12)</sup>。

言語活動で産出技能が必要であるのは疑い得ない事実である。それに加えて、産出技能の訓練が

<sup>12)</sup>例外は(英語については)聴く技能、(日本語については)聞く技能である。聴く技能は受け取り手に必須の技能だが、多くの日本人英語学習者で完全に欠落している。こういう不自然な状態は、不自然なインセンティブがない限り生じないという事は肝に命じるべきである。

聞く技能も決して優れているとは言えない。日本人の大半は相手が日本語で話した事を正確に覚えていない、つまりverbatimな記憶が劣っている。これは他国で暮らすと実感する。これは日本人が幼い頃から、知らない相手と会話を交わす必要に迫られないで育つ事の副作用だろうと私は推測している。

受容技能を高めるという意外な有効性を指摘する人も少なくない(齋藤 2011)。

日本には、文法問題を沢山こなせば自然と英語が読めるようになり、英語で話せるようになり、ついでに英語で書けるようになると誤解している人が非常に沢山いるのだと思う。だが、これは誤りである。言語の習得は [文法 + 語彙量 ⇒ {話す, 読む} ⇒ 書く] のような順序で起こる訳ではない。初歩的な文法を知らないと効率が悪いのは確かだが、一般に信じられているほど文法は重要ではない。

実践的な言語  $L$  の習得法は、次である:

- (I6) a.  $L$  の基本的な語彙と文法をざっくり学ぶ (この段階で正確さは重要でない)
- b. その後は、 $L$  の産出訓練を継続する。この時、書く訓練と話す訓練はどちらもやる必要がある。と言うのは、一方の技能の習得が他方の習得を自動実現しないからである。
- c. 上達に応じて自分の文法を見直す。

今から詳しく論じるように、 $L$  が母語と言語距離の遠い言語である場合、(I6b) では、おそらく話す訓練よりも書く訓練を多くした方が、 $L$  の構文直観が得やすい。

## 2. Lang-8 を使った初歩的的作文訓練

以上で私は英語で書く訓練が英語で話す訓練に前駆的な効果を持つ可能性を示唆した。だが、英語で書く訓練をどうやって実現すれば良いか? という問題には、それ固有の難しさがある。以下ではそれを明らかにしつつ、対処法を示す。

### 2.1 効果的な作文訓練の条件

最初に言うて置く必要があるのは、次である:

- (I7) 伝統的な作文訓練、すなわち一人の教員が複数の学生 (数名から数十名) を相手に行う添削

指導では、効果的な作文の指導ができない。

ではどうすれば良いのか?

### 2.2 具体的解決案

先の問題に対し私が見出した解決策は次:

- (2) 学生に (i) 一定の指針を与えて Lang-8 という無料のオンラインの相互添削サービスを利用させ、(ii) 自主学習させる。

その方が明らかに効果が出る。

#### 2.2.1 利点

(2) の方法に効果が出る理由は次だと予想している:

- (I8) a. 第一に、添削者が母語話者であり、実用されている表現を知る事ができる。正解が一つしかない訳でない事も知る事ができる。
- b. 第二に、学生一人一人の独自の要求に応える事ができる。
- c. 特に自分に合った速度で学習が進められる。
- d. 第三に、社会的な学習の恩恵を受ける事ができる。

(ii) の自主学習の導入には懐疑的な反応もあるだろう。これに関して今の私には反論できるデータがない。ただ、本当に自主的に任せてよいかどうかは、(iii) 学生自身の目標設定と (iv) 教員の評価法で決まると考えて良い。端的に言えば、一定の方針として何を与えるかが、自主学習の効果を決める。

## 2.2.2 不利点

提案手法の限界は指摘して置くべきだろう。大規模クラスで英作文を指導する必要がある時には、(2)は使えないだろう。進捗と成績の管理が大変だからである。技術的に克服可能な要因ではあるが、無条件に解決できる事でもない<sup>13)</sup>。

## 2.2.3 現実的な目標を設定する事の大切さ

私は Lang-8 を使った作文指導の (i) として、学生に次のように指導している:

- (19) a. 一般的な英語の表現を探すのではなく、実際に自分が使う可能性が高い表現を集中的に獲得するように心がけると良い。
- b. 具体的には、自分が日常的に使っている日本語表現を英語で何と言うかを Lang-8 を使って手探りで見つけ、覚える事を目的にするように。
- c. そういう自分専用の表現をなるべく多く身につける事を目標とするように。
- d. 効果を上げるのに急いではいけない。速く進む事より、確実に前進する事の方が大切。
- e. 毎日やらなくても良いが、長期的に努力を継続するように<sup>14)</sup>。
- f. 訓練の長期継続は必須なので、そのためには短期的にがんばり過ぎない事が大事。具体的に言うと、一度に多量の作文をしないように心がける必要がある。
- g. 多量に作文するのは手間がかかるだけでなく、得られた添削結果を分析し、吸収するのも時間もかかる。

<sup>13)</sup>Lang-8 が一種の疑似クラスルームを提供してくれると問題が解決できて、ありがたいのだが。

<sup>14)</sup>この点については、TechCrunch の次の記事が参考になるだろう: <http://jp.techcrunch.com/2016/12/20/duolingo/>

この他に学生ごとに異なる助言もするが、どの学生にも共通して言っているのは以上である。

## 2.3 Google translate の援用

(19) で示した Lang-8 を利用した英語作文訓練はそれだけでも伝統的な一対多の添削に較べて効果的だと期待できるが、私はそれにもう一つの工夫を加えた。

### 2.3.1 英作文に取りかかる際の閾値を下げる

私は学生に上の訓練を実践する時 Google translate を積極的に利用するように指導している。と言っても、相手の書いた英語を日本語に訳すために使うように言ってるのではない(そう使っても別に構わないが)。具体的には次のように指導している:

- (20) 学生が自分の使う日本語表現  $J$  を英語  $E$  に翻訳して Lang-8 で投稿する時、
- a. 自分でいちいち辞書を調べて翻訳するより、Google translate で  $J$  を英語に翻訳し、その結果を必要に応じて編集した結果を使った方が良い。
- b. 実際、その方が圧倒的に速いし、かつ正確ですらある。

これは (3) の言い換えである。

これに加えて、英語訳を得るために Google translate を利用<sup>15)</sup>する時、翻訳結果を制御するた

<sup>15)</sup>興味深い事に、日本語を英語に翻訳する作業に Google translate が使える事を紹介すると大半の学生は驚く。彼らには、翻訳ツールとは英語を日本語の翻訳するものだという先入観が強くある。これが示唆しているのは、日本の公式教育で英作文の支援がいかに手薄かという事ではないか？

めに、原文日本語を編集する手法<sup>16)17)</sup>も紹介するのだが、その詳細に本稿は立ち入らない。ただ、骨子だけを簡単に言うと次のようになる:

- (21) a. 正解を求めるより、実験的探索=様々な可能性の試行錯誤するように。  
b. 翻訳結果が思い通りにならない時、その理由を考えるように。

特に(21a)や(21b)には英語の語彙を増やす効果が期待できるばかりでなく、自分の母語である日本語をより良く理解するきっかけになるという恩恵も期待できる。

### 2.3.2 でも、それは邪道なんでは？

この指導は英語教育的には「邪道」かも知れない。だが、私としては、これが効果が出る<sup>18)</sup>という意味で有効な指導法だと考える<sup>19)</sup>。

効果が出ている理由として、少なくとも次が挙げられる:

- (22) a. 利用目的から考えて、添削を期待して投稿する版の完成度を高める必要はまったくない。目標は添削後の表現を覚える事

<sup>16)</sup>自動/機械翻訳の分野では、言語  $S$  から言語  $T$  への自動/機械翻訳で、翻訳精度を上げるために、 $S$  で書かれた文章を「 $S$  と  $T$  の中間言語」に変換する事がある。中間言語は  $S$  を一定の規則で編集(特に  $T$  で不可欠な要素の補強を)した場合もあるし、 $S$  でも  $T$  でもない抽象言語の場合もある。日本語の原文を、英語の自動翻訳の精度が上がるように編集した結果は「中間日本語」と呼ばれるものになる(この手順の概要説明の必要性は折田奈甫(東北大学大学院情報科学研究科)の指摘による)。因みに、中間日本語は、英語が得意でない学生が英語を日本語に「直訳」した時に生まれる「奇妙な日本語」と良く似る。

<sup>17)</sup>日本語の編集作業が必要かつ有効なのは、言語学的には自明である。英語では義務的な要素(例えば主語や他動詞の補語となる名詞句)が日本語では任意要素(と言うより余計な要素)だからである。そういう要素が明示化してある日本語文を原文にすれば、基本的にはどんな言語への翻訳結果も精度が上がる。

<sup>18)</sup>ただし、定量評価は執筆時点で未実行。

<sup>19)</sup>逆に言えば、効果が出ると判っていて、実行に困難もない学習法を敢えて採用しないのは、誤った前提や先入観や教える側の自己満足か学生のマゾヒズムの産物でしかないのではないかと言いたい。

なのだから、この「下準備」の作業では可能な限り手を抜くべき。

- b. 投稿する版の準備で手間がかかればかかるほど、この訓練の継続が難しくなる。別の言い方をすると、下準備で手を抜いた方が、結果的には効果が上がる。

事実、Google translate の併用は、学生に英作文を始める時の「億劫さの壁」を越えさえ、とにかくやってみるかという意欲が出やすくする効果が期待される(し、かつ実際に期待されている効果が出ていると思われる)。だから、それが英語教育の見地から見て「邪道」かどうかは、最小労力で最大効果を目的とする限り、瑣末な事である。

だが、この点にはもう少し説明を補う必要があるかも知れない。

### 2.4 学習は何のために? — 結論に代えて

私はどんな場合であろうと、効果が出る方法は正しい方法だと思っている。この哲学に照せば、効果が出る学習法こそ正しい学習法である。

#### 2.4.1 効果的な学習の成立条件

良い学習はどんな場合でも、次の条件が満足された時に成立する:

- (23) 効果的な学習 = 正しい目標設定 × 効率的な方法 × 最低限の継続

- a. まず適切な目標  $G$  を定める。  
b. 次に、 $G$  への近づき具合 = 効果を、最小労力で、最大量にする方法  $M$  を選択する。  
c.  $M$  を長期にわたって継続する。

これは私が採用している訓練の設計論の根幹をなす。

#### 2.4.2 言語教育での教師の役割とは何か？

(23) の設計論に加え，私は次の教育上の方法論=哲学を持っている<sup>20)</sup>：

- (24) a. 学習は学ぶ者がすべてを本人の意思で，自力で実現できる場合に最大の効率で実現される．
- b. 教師の本当の役目は知識を教える事ではない．そうではなくて，学びのキッカケを与える事，学びの意欲を与える事，効果的な自学自習法を提案し，実演して見せる事である．

(24a) の方法論は多くの教員に共有されているものではないだろう．教員には教える事が，それ自体で好きな人がいる．私の考え方はそういう人たちからは強い反発を受ける可能性がある．しかし，誤解しないで頂きたいのだが，私は教師が無用だと言いたい訳ではない．単に(24b)のように，役割を限定しているだけある．

私は(24)に示した哲学に支えられ，中学生か小学生になって英語に初めて接した「普通」の日本人が英語を実用的に話せるようになるための訓練法を設計できないものか？と考えた．その実現案が先に紹介した Lang-8 と Google translate を併用する方法である．

### 3. 終わりに

#### 3.1 まとめ

本文書で紹介した英作文の訓練法は，次の学習の(逆行)エンジニアリングに基づく設計の産物である．

- (I) a. 英語で自由に話せるようになるためには，それに先立って英語で自由に書けるようになる必要がある．

<sup>20)</sup>これは試行錯誤の末に独自に到達した方法論であるが，学習心理学の概説書(キャリアー 2015)でも支持するデータや知見が紹介されている．

- b. 英語で自由に書けるようになるためには，伝統的な一対多の英作文の指導法は効率が悪い(ので，やらない方がマシかも知れない)．それに代わる効率の良い方法を開発する必要がある．

- c. 英作文には労力がかかる．特に辞書を引きながら単語ごとに日本語を英語に直すとなると相当に手間がかかる．これだけで学習者が訓練から遠ざかる十分な理由になる．従って，多くの人が英作文に進んで取り組むようになるためには，とっかかりの閾値を下げる工夫が必要不可欠である．

幸い，(Ib) では Lang-8 の利用を，(Ic) では Google translate の利用を試みる事で (Ia) の目的を簡便に，かつ無償で達する事ができ，更に効果上がる事が経験から確かめられた．

#### 3.2 最後に

本文書で紹介した Lang-8 と Google 翻訳を併用する英作文訓練法はオンライン環境で極めて簡単に，しかも無償で実行できるので，広く試される価値があると思う．それが私が本文書を公開する理由である．

私が提案した方法で長期的に見て日本人の英語力が上がり，しかも大学だけでなく，高校や中学の英語教員の負担が減るなら，私としては願ったり適ったりである．

#### 参考文献

キャリアー，ベネディクト. (2015). 脳が認める勉強法: 「学習の科学」が明かす驚きの真実! ダイヤモンド社. [原典: Benedict Carey. *How We Learn: The Surprising Truth about When, Where, and Why it Happens*, 2014. Random House.].

黒田 航. (2011). 理工系の学生向けの英語の聞き取り訓練の最終報告. In 山本 昭夫 (Ed.), 「理工系英語教育を考える会」論文集. 早稲田大学情報教育研究所.

- 黒田 航. (2012a). 日本の英語教育における「人文系バイアス」とその望まれざる帰結: 理工系 (のエンジニア育成) のための英語教育の必要性. In 公開研究会『理工系英語教育を考える』論文集, pp. 11-27. 早稲田大学情報教育研究所.
- 黒田 航. (2012b). 理工系の学生向けの英語聞き取り訓練: 英語の授業で *The Feynman Lectures on Physics* を仮想受講する. In 日本英語教育学会第 41 回年次研究集会論文集, pp. 15-26. 早稲田大学情報教育研究所.
- 黒田 航. (2013). 日本人大学生向けの英語の聴き取りと速読みの同時訓練: TED 講演を使って. In 日本英語教育学会第 42 回年次研究集会論文集, pp. 35-43.
- 齋藤 孝. (2011). 必ず覚える! 1 分間アウトプット勉強法. PHP 研究所.